

〔日時：2020年9月5日(土) 13：15～14：45〕
〔会場：神戸学生青年センター 会議室〕

神戸の闇市をめぐる主体と市街地形成

村上しほり

はじめに

戦後に都市を取りまく複雑な社会空間条件が複雑化していく中で、住民のまちづくりや生活再建、つまり自分たちの商売をどのように再開していくか、どこに移転して住むかといった様々な取り組みが生じます。それらの相関が、神戸の中心市街地の新たな賑わいや地域の文化を育てていったことについて、本日はお話しします。

神戸の闇市の代表事例は「三宮自由市場」です。何が「自由」なのかと思われるでしょう。戦後の全国各地では、鉄道駅前に闇市が生じていきます。神戸市内では、三宮や新開地や六甲道など、さまざまところに現れました。その中で、全国的にその名が知られた大規模な商業集積となったのが三宮の闇市でした。全国的にというのは地元最良ではなく、1946年末の『新岩手日報』の記事の中で「日本一大闇市場神戸の三宮」と表現されたことが分かっています。

現在のJR三ノ宮駅から元町駅を越えて西に神戸駅までは、鉄道高架が駅を挟みながら続いています。戦後、その鉄道高架下と南側の街路上に闇市が現れ、最初は高架下の立ち売り商人であったのが、急速に範囲を拡大して路上を覆っていきました。そうしてできた闇市が「三宮自由市場」と呼

ばれるようになり、最盛期には約1,200店舗に上ったというのが展開の概略です。

1946年5月になると、闇市に溢れかえった露天商を組織化して秩序を保つために、自治統制を図るべく商人組織が設立されました。なかでも、全国的に古くからあった露天商組織の神農会や、ローカルな組織として元町高架下で生まれた松明会、在留外国人組織の台湾省民会と華僑総会と朝鮮人自由商人連合会の代表が一堂に会して、どのように三宮自由市場を秩序化していくかという話し合いをするようになります。

これから、三宮の闇市の経緯と営業者に着目して、新たな商業集積への展開の事例をいくつか紹介したいと思います。

1. 戦後神戸と占領のはじまり

空襲による罹災

まずは闇市発生の背景を整理します。神戸大空襲で神戸の市街地は大きな被害を受けていました。1945年上半期に128回もの空襲を受け、山と海に挟まれた東西に細長い市街地の7割近くが罹災しました。大正期から昭和初期に建てられたRC造建築物、例えば旧外国人居留地の建物や鉄道駅舎や高架橋は被害を受けながらも焼け残りしましたが、それ以外の木造家屋の大半は焼失してしまいました。

「神戸市疎開空地・焼失区域並戦災区域図」を見てみましょう。三宮駅というと、旧生田区と旧葺合区の区境、現在のフラワーロード付近に位置していますが、周囲一帯が焼けていたというのは地図からも明らかです。

現在の中央区（1980年に生田区と葺合区が合併）を見てみると、およそ区境の東側は3月17日、西側は6月5日と罹災のタイミングが異なることが分かります。鉄道沿いに第5次疎開空地となった範囲も見えます。これは、昭和初期に完成したばかりの鉄道高架橋と駅舎の焼失を防ぐために、周囲の木造建物を壊したことを意味すると考えられます。三宮の駅前には

戦前から旧そごう百貨店（現・阪急百貨店）がありました。これを守るためにも、南側に隣接した小野中道商店街の一部を建物疎開させたことも記録に残っています。

1945年9月に上空から撮影された三ノ宮駅付近の写真を見ると、高架下には人が集まっていて、南側の道は遊歩道のような用いられ方をしていたのがわかります。南北に走る現在のフラワーロードには神戸市電が通っていて、高架の南側で東へ曲がる路線もありましたが、交差点西側には電車が通っていませんでした。幅員も現在よりも狭く、馬車や自転車や人が通行する遊歩道としての利用が、戦前からの都市の交通事情としてありました。それが、街路上で市場を開けた前提の一つです。

戦災都市・神戸に現れた闇市と占領軍

そんな戦災都市・神戸で「闇市」が『神戸新聞』で初めて報道されたのが9月17日でした。その10日後には、占領軍が神戸に駐留を始めたことが報道されました。両者の登場時期は重なっていて、闇市が高架下にてきてしまったこと、法外な饅頭を売る闇商人をどうしていくべきかという報道の横から、新たに日本を統治する立場も生まれるわけです。戦後の都市に現れた新たな存在によるさまざまな衝突が、次第に過熱していく状況の一つとして、闇市の展開もあつたと言えるでしょう。

占領軍が関西に占領を始めたのは、1945年9月末です。和歌山の二里ヶ浜に上陸して、和歌山駅から神戸の三ノ宮駅に鉄道で向かった【図1】のが主たるルートで、道路からジープで来る部隊もありました。和歌山に上陸した第33歩兵師団の半数が神戸に動き、さらに宝塚、姫路、西宮など兵庫県下の各地に展開していきました。大阪と京都にも拠点を置き、神戸には2週間半で1万1,000人が進駐を始めました。

神戸において占領軍の居住・勤務したエリアの主な場所は、罹災した市街地の中にあり、闇市とも近接しています。旧居留地の神港ビルには占領軍の神戸基地司令部が置かれ、焼け残った堅牢なRC造建築物が多かった



図1 和歌山の二里ヶ浜に上陸後、鉄道に乗り込む兵士たち
(米国国立公文書館所蔵)

旧居留地の戦災ビルと港湾施設が大規模に接収され、占領機能を展開していきます。

当然、都心部に暮らせるスペースは足りなかったため、占領軍将校宿舎としては山手のトアホテルや富士ホテル等が接収されました。翌年には、家族を本国から呼び寄せるために、阪神間の個人所有の邸宅を接収して、それでも足りないため、現在の神戸大学周辺の土地を大規模に接収して占領軍家族住宅地区「六甲ハイツ」を造成したのが特筆すべきものでした。また、若い兵士の暮らしの場としては真っ先に、新開地の東に隣接した「キャンプ・カーバー」と三宮の南側の「イースト・キャンプ」が造られ、かまぼこ兵舎が建てられました。周囲の治安の乱れや、イースト・キャンプと闇市の近さも問題になっていきました。また、キャンプが10年以上残ったことによる、接収跡地と周囲の復興とのズレが、後に、昭和初期までの

性格とも戦災復興で計画した性格とも異なる、違和感のあるエリアを生み出していきました。

実はこうした占領軍の影響については、闇市以上に神戸では認識されてきませんでした。これまでは闇市のことにしても、日本の自治体と民衆との戦いであったと語られてきましたが、実態は違います。当時の新聞の調査からは、日本の自治体（兵庫県、神戸市）は闇市の取締りに消極的で、健全な商業集積にして集客に繋げていきたいが、治安や衛生面に問題があるという占領軍の指摘を受けて取締りが厳しくなっていくわけです。

占領軍の拠点と闇市の立地

占領末期の神戸の中心市街地における、占領軍の拠点と闇市の位置関係を見てみましょう。JR三ノ宮駅の南側、東遊園地の東側に位置したイースト・キャンプは約31万㎡と広大で、その規模は地図で見なくてはわからないかと思います。従来の書籍などの図示では一回り狭く描かれていることが多いのですが、米公文書で当時の図面などから確認すると、東西の幅はフラワーロードから生田川に至っています。キャンプでは、かまぼこ兵舎以外に木造バラックの兵舎も造っていたことがわかりました。旧居留地も焼け残った建築の多くが接収されて占領軍拠点になっていました。また、湊川新開地では、戦前からの劇場街だった新開地本通りとほぼ接するような距離感でキャンプ・カーバーが置かれてしまいました。それによって、従前の商業集積であった新開地本通りや小野中道商店街（三宮）の復興が妨げられました。

三宮の闇市の場所を示します。現在は三宮高架商店街と元町高架通商店街になっている高架下と、南側街路上の店舗が移転して三宮国際マーケットが生



図2 1945年末の占領軍の記録に見る
“Street scene in Kobe”

まれていきます。占領軍は、占領初期の全国の都市の状況を記録して残したりしていますが、その中で、都市の特徴をまとめた中に、なぜか神戸は路上の闇市の風景が取り上げられて写真【図2】が載せられています。占領軍にとっても、印象的な状況であったのではないかと思います。

2. 闇市の発生経緯と変容過程

神戸における闇市と戦災復興の始動

神戸の闇市は、1945年9月17日にその発生を報じられてから、急激に拡大していきます。2カ月後には、高架下に収まらずに南側路上まで広がっていました。

そもそも「闇市」とは何かというと、戦中からの統制経済が続いている中で、公定価格を外れる価格、つまり「闇値」で売買している店舗群です。1946年初頭になると、占領軍と警察による闇市への取締りが激しくなっていきます。そして、同年上半期には商業集積が大いに増えます。闇市に限らず、公設市場の再開や私設市場の発生、新たな飲食店街も増えていきます。

同年8月から9月になると全国的に路上の闇市の全撤去方針が定まり、時期の遅れはありつつ、兵庫県でも9月に撤去が行われました。民族集団の商業組合やテキ屋組織の協議によって分散移転が始まるのはこの時期です。闇市の内部では日々さまざまな動きが繰り広げられますが、闇市の大半は1年余りという短い期間に生まれて散っていきました。10月になると、その移転したものが三宮国際マーケットや三宮高架商店街を成立させて、それらがまた違う動きをしていきました。

同時期の戦後1年から2年にかけては、戦災地の復旧として建築物も急増し、戦災復興土地区画整理事業も始まっています。ただし、物資も空間もきわめて不足する状況下では、都市の人口増加を抑えるために都会地転入抑制緊急措置令が1946年3月に公布されます。翌年12月には都会地転入

抑制法として制定され、これが1年間続きました。

その結果、戦中に疎開していた人たちは都会に帰れない状況が生まれましました。神戸や大阪では度重なる空襲を受けたために、戦中には学童疎開や、母親と子どもが縁故疎開をして父親のみが都市部に残るということも多く、自分の住んでいた場所を離れた人びとが多くいました。そして、終戦後はひと月で占領軍が来て、帰るタイミングを図っている間に帰れなくなる状況が生じ、その間にも新たに流入した人びとや行政の復興計画でまったく異なる環境が形成されてしまいました。

戦災復興土地区画整理事業は1945年末に始まっています。策定した基本計画を基に、街路の拡幅整備やそれに伴う宅地を含む戦災地の整理の進め方や、広い視野で防火・防災を実現する復興計画をと企図されました。しかし、行政主導の大規模・広範囲な区画整理は神戸市では初めての試みであり、これは行政の思惑と対象地区に暮らして営業している民衆との利害が対立することもあり、実施には長い時間がかかりました。行政の復興に先んじて動き出したのは何とかして都市部に暮らし続けた人びとや、新たに流入して商業集積の形成に関与した人びとでした。

戦災復興から再開発へ

神戸市の戦災復興から再開発の期間に起きたことを概括してみると、都心部の大部分が戦災を受け、さらに占領軍の接収を受けて、住民が自由に使える土地・建物のストックを失っていました。例えば、接収地に従前より暮らしていた人びとはできれば近場で転居したいと考え、接収地以外の三宮地域で居住を伴う商業集積が密集傾向を増しつつ、調整を図りながら戦災復興が進められていきました。

1957年に、神戸市庁舎が現在の場所である東遊園地の北側に湊川から移転して、同時期には旧そごう百貨店の南側には神戸国際会館、JR三ノ宮駅東側には神戸新聞会館も完成しました。それらの三大戦後建築が造られ、三宮は神戸の中心として決定づけられていきます。また、1966年から74年

には三宮地区市街地改造事業が実施され、阪急三宮駅の南側に現在も位置するサンプラザ、センタープラザ、センタープラザ西館という3棟のビルが建設されました。元々は戦災復興期に生じた闇市の隣にあった木造密集家屋・飲食店舗群の整理と、一時は闇市が立地していた高架の南側街路を拡幅することの両立が、この事業の目的でした。街路幅員を14メートルから36メートルまで拡幅して、立体高層化を図った結果が、再開発ビルの建設であったわけです。

地図や写真に見る商業集積の分布

三宮から湊川新開地までのエリアに戦後現れた商業集積について示した図【図3】をお配りしています。この図を見ると、まず目に付くのが神戸駅の周りのキャンプ・カーパーとモータープールの大きさ、そして三宮駅南のイースト・キャンプの大きさです。三宮から元町の間には、三宮自由市場が展開して生まれた三宮国際マーケット、三宮高架商店街、元町高架通商店街があり、闇市ではない新興の飲食店街・商店街としては

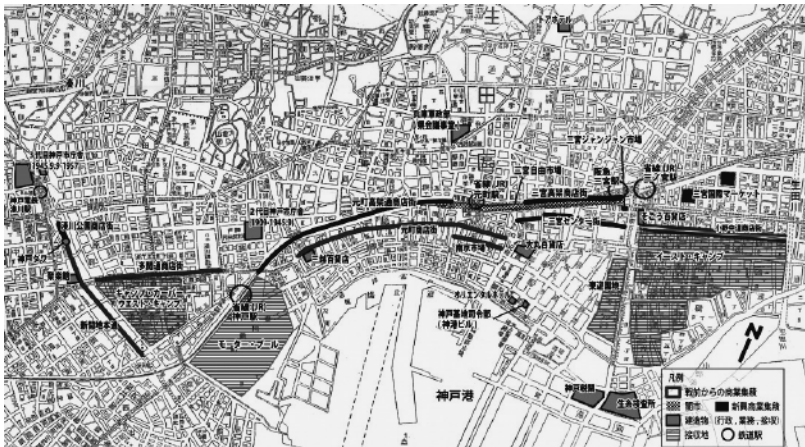


図3 三宮・元町・新開地の戦後商業集積とGHQ接収地・施設
 (「最近神戸市實測地圖」1945年6月を元に作成)

三宮ジャンジャン市場や三宮センター街などができています。

本日は詳しく触れませんが、神戸駅周辺では、興行街としての新開地本通りの再建が最も重要な課題になっていきます。戦前は多聞通沿いの多聞通商店街や交差した位置の有馬道商店街もありましたが、キャンプによる接収と、その後の多聞通の拡幅で姿を消してしまいました。湊川公園には引揚者の生活再建のために期間限定の商店街が開業しますが、これは後に、神戸博（1950年）を開催するための会場整備に抗う占拠となりました。また、聚楽館は戦前より市内外から人が集まる総合娯楽施設として愛されましたが、占領軍専用のシアターとして接収されてしまいます。占領軍の接収によって、三宮も新開地も翻弄されたことは、ここに立地していた施設や商業集積の紹介からもわかるかと思います。

戦後の湊川新開地・元町・三宮における商業集積の特徴

湊川新開地と元町と三宮に展開した戦後商業集積を分類して、特徴を整理したものがこれです。戦前から続くものとしては、湊川公設市場（1918年開設）や三宮公設市場（1920年開設）、南京市場（1912年開設）、元町商店街（1874年開設）が各地で再建されました。湊川新開地では、引揚者のために造られた湊川公園商店街や、一時的にテキ屋が差配したとみられ、新聞記事以外に名称も残っていない新天地ブルーランドなどの小規模な商業集積なども生まれました。

一つのエリアではあっても、異なる性格を持った商業集積が次々とできては消えていったのは、戦後の流動的な状況のあらわれでした。ただし、新開地で特徴的なのはテキヤの民有地利用が多かったことです。勝手に空地を占拠するのではなく、どのように利用するかを計画して地主と交渉し、警察の許可を取り、営業を差配するという戦前からのテキヤの職能を活かして行っていました。一方、引揚者の場合は、湊川公園を引揚者の生活救済のために一時的に使いましょうと行政の許可が出されました。湊川公園には湊川公設市場が立地していたので、新しい商業集積を造るためにやや

東に移るといふ場所のとりあひが起きていました。三宮では、三宮国際マーケットは在留外国人が不在地主との用地交渉を行い、行政関与も生じつつ新たな商業集積を築いた事例です。三宮ジャンジャン市場は自由労働者と呼ばれた港湾労働者や浮浪者の生活救済のために、飲食営業に対する規制を特例的に緩めた事例です。それらの多様な人びとを受け入れた地域の特徴が、後に三宮の盛り上がっていく布石になっていたのではないかと思われます。

湊川新開地と三宮の特徴をまとめておきましょう。新開地は、二・三代目の神戸市庁舎が付近に立地していた、戦前の神戸の都心でありました。近代神戸の都心であったために、商店街・市場などの商業集積も、盛り場と呼ばれるような映画館・劇場、飲食店も豊富にありました。戦後も、新開地の復興や盛り場再建は大いに期待されます。新聞紙上でも、新開地の映画館を早く再建したいが資金が足りないという話が早期より現れます。戦前から商売していた日本人が多く、戦後に闇市の新開地自由市場も発生しますが、テキヤが警察と話し合つて営業差配を行い、早期に秩序化していきました。厳しく秩序化を図つた理由は、三宮の混乱を目の当たりにしていたからです。

三宮では、昭和初期に阪急、阪神、JRの鉄道三駅が整備されていて、当時最新の「新開地」といふ状況でした。そして、真新しい鉄道高架橋の下部空間をどのように使おうかという議論を昭和初期にしていますが、戦時の影響でペンディングとなつた高架下が残されました。交通至便かつ神戸港にも占領軍の拠点にも近かつたこの場所では、闇市の営業主体に外国人や余所者が多かつたことが特徴的です。民族が異なる人びとだけではなく、神戸市外から来た日本人や港や鉄道から入ってくる多様な地域の人びとがいたことで、闇市の三宮自由市場はカオスの様相を呈していきました。しかし、完全に制圧すると盛り上がりには欠けるというバランスの難しさで、結果的には、三宮が活力ある繁華街に育っていきます。外部から流入する人びとが多かつた背景には、鉄道駅だけではなく、占領軍の意向や、梅田

での厳しい取締りを逃れて闇商人が流入したことなどの影響もありました。

3. 三宮の闇市営業者の属性

多民族の営業者

この三宮の闇市営業者の属性に注目してみると、日本人、中国人、朝鮮人、台湾人という四民族が混在する多民族であったことが特徴的です。1945年12月に多発していた外国人業者間の紛争を避けるため、各営業地区の設定に関する協議が行われました。その際、兵庫県警に集められたのが、占領軍のMPと兵庫県警、検事局、朝鮮人連盟、華僑総会、台湾省民会などの代表者でした。【図4】

当時はまだ商業組織が結成されておらず、在留外国人組織の代表者を集



図4 1946年1月頃の三宮自由市場

(『國民地理』第1巻第7号、目黒書店、1946年7月)

めるかたちで始まります。代表者が話しあう機会や調整する必要が生じて、商業組織が結成されたという経緯がわかっています。三宮自由市場では、朝鮮人自由商人連合会が在日本朝鮮人連盟のもとに結成されます。これは1945年末と、最も早期の動きでした。

次いで、台湾省民会のもとには国際総商組合が翌年5月に結成されます。この1945年12月から翌年5月には、最も商売の割のいい三宮の高架下における利権争いが起きていて、それが後に映画で誇張して描かれもしています。これらの闇市をめぐる利権争いの収束を図って組織化をし、話しあいで解決しましょうというかたちが取られるようになりました。

「余所者」の流入

「台湾人の五円饅頭売り」は、闇商人が現れた最初期に登場したことがわかっています。『神戸新聞』の1945年11月6日付記事を引用します。「戦争中、日本兵とともに軍属船員として活躍した台湾人だが、この人達は終戦後神戸港から夥しく吐き出されて下船した。そしてなかには生活に困窮する者が続出して、元町や新開地の省線ガード下で五円饅頭売りを始めている。中国人といっても五円饅頭売りには台湾人が多いのはそのため〔後略〕」であったという記事です。

台湾に帰る船舶が不足していて、さらには住宅も医療も戦災給付金も退職金もない状況の中で、生きる手段として饅頭を売っているという事情を訴えている談話が6件見られました。神戸の闇市は台湾人の五円饅頭売りから始まったと言われるが、新聞でも事情があるのだと取り上げるほどに仕方がない現象として捉えられていたことがわかります。

一方では、日本人の他地域からの流入も起きました。1945年11月27日の取締りを報じる記事では、大阪や岡山方面からの闇屋の買い出し部隊がやって来ています。湊川新開地から三宮へと、より儲かる闇市に流入してきます。取締りが緩い地域には加速度的に闇商人が集まっていく傾向があって、各地から三宮に集まってきた結果、驚くほど大きな闇市ができました。

1945年9月29日付の「闇市に近く大鉄槌」と題した記事を引用します。

「神戸の新開地、元町高架下の両盛り場における食糧闇売りはここ二三日来急激に増えて来た。これは大阪における連日の検挙で姿を消した闇売りが神戸に流入した影響だとみられているが、それにしてもその雑踏ぶりは言語に絶する無軌道ぶりを発揮している。検察当局では警察能力を最大限に発揮して近く大検挙を行うべく目下準備をすすめている。神戸の場合は支那人の街頭売りが主体となっているので敗戦した日本の警察威信では兎角及ばざる難点もあり」

(1945年9月29日付『神戸新聞』)

また、11月27日付の「闇市に初の大手入れ」と題した記事も読んでみましょう。

「生田署では西所長以下吉田署僚警部指揮のもとに全署をあげて百四十五名の警官が出動、午前八時検挙は開始された。この日あることを察知していちやく古狸の闇商人は姿を晦まし、素人の闇屋が引っ掛ったほか開店中のものは案外すくなく応援に駆けつけたM・P十数名もいささか手もちぶさたの態があったが、阪急三宮元町両駅、省線三宮駅から下車した大阪方面からの流入闇屋買出し部隊なども一斉に連行され十時には生田署三階の訓示場は満員。室を埋めたりユックサク、風呂呂敷包み、トランクなどには甘鯛、鯛、鮪、蝦、いかなごなどの鮮魚類、大根、水菜、ねぎなどの野菜類、藪、米、ビール、ローソク等々、市民の台所に家庭に縁遠いものばかりがずらりと並んだ。係官総出で取り調べたが買出し、田舎からの土産といったものが二割であとは商売目あてだが、係官の前ではべら棒に安い売値を申し立てて苦笑を買うなど、あまり常習犯の大ものは見受けられず」

(1945年11月27日付『神戸新聞』)

これらの取締り報道から見ると、早期より大阪方面から闇商人が流入し続けている傾向があって、年明けには大阪でますます激しく闇市が取り締まられたことで、三宮の闇市の規模拡大が進んだのではないと思われる。取り調べると、買出しと田舎からの土産が2割で、残りは商売目当てというように、物資を持っているから闇商人というわけではないところに取締りの難しさがあったようです。

1946年3月2日時点と報じられた営業者の内訳調査では、日本人1,350名、中国人320名、朝鮮人95名の計1,765名と発表されていました。発生から半年で、既に日本人の営業者が大半を占めていたことが読み取れます。つまり、三宮は外国人による闇市だというのは、外国人営業者の数が過半であったという意味ではなく、営業者の組織化を導いたのが在留外国人組織の代表者で、そのリーダーシップが大きかったことを意味しています。単に取りまとめただけではなくて、その後に移転をさせる際に、新たな都市空間の構成要素を生み出した影響力の大きさが、名前を残したのではないのでしょうか。

4. 三宮の戦後都市環境形成のコントラスト

公認飲食店街「新楽街」

三宮に生じた戦後の都市環境形成は様々でした。最も早い時期に闇市の隣に形成されたのは、公認飲食店街の「新楽街」です。終戦直後の8月27日には、兵庫県警保安課による慰安娯楽地帯の三宮地域への設置計画が報じられます。ダンスホールやキャバレーやナイトクラブ、映画館、麻雀、ビリヤードや食堂などを設営しようと県警が言い出した背景には、すぐにやってくる占領軍向けの娯楽の整備という想定があったようです。しかし、いざとなると占領軍は高架下という立地を拒否したため、他のビルに整備されることとなり、高架下の利用計画がなくなりました。そこで、せっかくだから何かに使おうという話で、公認飲食店街を開業する運びになりま

した。

健全な飲食店街を設置することが目的だったため、戦前から商売を営む日本人業者に貸すことが計画されて、カフェ、スタンド喫茶、和・洋・中料理屋、食堂などを入れて、1945年11月1日に開業しました。既に闇市が拡大している時期なので、露店群の治安や衛生状態とは一線を画す、「神戸市民のオアシス」を整備したと報じられました。

その実態を知るために店名、業種、店主を整理したところ、開業翌月には44軒のうち飲食店が35軒に上り、写真や住宅地図と照合すると、いくつかの店舗が確認できました。路上の三宮自由市場を撮影した写真に見える「中華公司喫茶」は、新楽街で喫茶・洋菓子を営んだ江さんによる店舗「中華公司」と関係があるのではないか、ということにも気づきます。また、新開地で多くの飲食店舗を営んでいた柚久保さんという方が和洋食堂の「国際食堂」を支店として出店しているということもわかりました。

新楽街を撮影した写真は探しても見つからず、新聞記事とある時期の商工名鑑にしか記録がないのですが、拙著『神戸 闇市からの復興』を読んだと手紙をいただき、2019年に聞き取りをさせていただいた芦屋在住のN氏が、終戦直後の写真を撮られていました。神戸大学工学部の前身の長田に所在した神戸高等工業学校へ通っていた帰り、三宮の闇市に寄ってみて歩いてみたことがあり、中に入るのには怖いけれども、近くを歩くのは面白かったから撮ったのだと仰っていた数枚の写真に、ちょうど国際食堂が写っていて、大変驚きました。活字だけではわからない情報が一枚の写真から読み取れる、写真は大きな可能性のある歴史資料だと思います。

日本人営業者による三宮ジャンジャン市場

次は、日本人営業者による三宮ジャンジャン市場の事例を紹介します。これは、阪急三宮駅から街路を隔てた南側の街区、三宮センター街との間に位置していました。現在ここにあるのは神戸マルイです。

ジャンジャン市場は、三宮自由市場が賑やかであった1945年末の路上店

舗撤去時に隣接した空き地に移った飲食店街でした。日本人の露店営業者50店が集まって店舗兼住居群を形成した、安価な飲食営業の集積は、自由労働者と呼ばれた日雇い労働者や、浮浪者が集まる場所になりました。初期の様子は、炊き出しのような風景として写真に残っています。

発生当初は営業者による組織がありませんでしたが、商業組合も結成され、路地に板を渡したり、入り口にアーチをかけたり、衛生面にも配慮した営業を目指すようになっていきました。1947年には料理飲食営業に対する休業措置なども始まりましたが、住宅も持てない生活難の人びとに安価な食事を提供する役割を認められ、特例措置で営業が許可され、繁盛しました。

1950年代の写真【図5】には、阪急三宮駅南側路上の緑地帯付近に集まって仕事場の神戸港にトラックに乗って向かう労働者たちの姿が見られま



図5 1950-55年頃の阪急三宮駅南側路上
(神戸市文書館所蔵)

す。この右側（南側）にジャンジャン市場が位置していて、三交代で働く港湾労働者の台所として、復興が進む三宮駅前で異彩を放っていたようです。1965年の三宮の駅前を見ると、周りも同じような木造密集エリアですが、この直後には1966年度に始まった三宮地区市街地改造事業によって街路の拡幅と再開発ビル建設が進められます。これが戦後に14メートルから36メートルまで拡幅されたという中央幹線です。

ジャンジャン市場については、この事業が1974年度に完了した後、80年の写真を見ても、その跡地がまだ空地のままです。戦後の三宮の街路拡幅はいま挙げた中央幹線だけではなく、南北に走るフラワーロードの拡幅、その地下にあたる三宮地下街の造成も行われました。その流れの中で、ジャンジャン市場は1965年に三度発生した大火を契機に、最終的には三宮地下街の造成を理由に東の磯上方面に移転をしました。1970年前後は、戦後三宮の西側一帯が姿を変えた一つの画期だったと言えそうです。

在日コリアンによる三宮国際マーケット

最も長い期間を調査に費やして明らかになったことが多かったのは、三宮国際マーケットの事例です。三宮自由市場の展開の代表事例ともいえる三宮国際マーケットは、闇市出自として知られていましたが、発生当時の空間的特徴（立地や地権等）や、その後の展開を客観的に捉え直した成果はこれまでありませんでした。再開発誌だけに頼るのではなく、『神戸新聞』の悉皆調査によってリアルタイムの報道内容を整理し、当時の状況を知る人に聞き取りを行い、住宅地図や公図をつき合わせる多角的な調査を行いました。そうして明らかになったことの一部を紹介します。

三宮の闇市の展開は、先ほど紹介した通り1945年9月から約1年間のうちに、JR高架下南側路上に立ち売りや屋台店、恒久的な店舗へと形態を進化させ、範囲も拡大していきましたが、1946年8月には全国一斉に闇市撲滅の「八・一肅正」が行われました。ただし、この闇市の一斉撤去を当初、兵庫県は行いませんでした。兵庫県としては、闇市の暴動を恐れたことに

加え、商業集積としての地域へのメリットが神戸市からなくなることを避けたかったわけです。しかし、それがうまくいくはずもなく、大阪府が一斉に闇市を潰したことで大阪を追われた闇商人が神戸に押し寄せました。この傾向は1945年末時点からありましたが、それまでの自治統制による秩序も失われたことで、9月には神戸でも占領軍の指令によって路上店舗を撤去することに決まりました。

三宮国際マーケットを成立させたのは「朝鮮人自由商人連合会」でした。1945年12月に三宮自由市場で混沌とした闇市の秩序化のために営業許可地域を定める計画が持ち上がり、「中国人・台湾人・朝鮮人・日本人」の各民族の営業者の代表が協議を行い、外国人と日本人の営業地域を分けようとする動きがありました。その直後の12月末に、在日本朝鮮人連盟を基盤とする商業組織「朝鮮人自由商人連合会」が結成されました。

この結成には、同業者間、対警察との間で争いが多数生じていて、その解決のために自治的統制を図る組織が要された背景がありました。戦前からテキヤがいた地域ではその下に素人商人を抱えていきますが、三宮の場合は多くの人が集まってきてから組織が生まれた、その順序に違いがありました。また、三宮では「闇市」「闇商人」と呼ばれることを厭った商人たちが「自由市場」「自由商人」であると言い出します。新聞報道から時系列を追うと、その先駆けであったのは、組織名に「自由商人」と掲げた朝鮮人自由商人連合会ではなかったかと思われます。

彼らは1946年10月に三宮国際マーケットを造ります。まずは、八・一肅正を契機として9月から10月に、交通妨害となる屋台店を撤去することになり、三宮自由市場のうち路上店舗を撤去・分散移転させることとなります。ここで、高架下の店舗については交通妨害にならないために撤去の対象外になりました。その路上店舗の撤去を受けて、朝鮮人自由商人連合会は統一的な集合店舗の建設を提案して、10月には三ノ宮駅の東側に間口1間半の平屋600戸を1か月半で建設し、「三宮国際マーケット」を開業しました。【図6】同連合会は不在地主に借地交渉を行い、それには県警も協力



図6 三宮東地区に開業した三宮国際マーケット（『新時代への飛翔 サンシティ
竣工記念誌』雲井通六丁目地区市街地再開発組合、1990年）

したそうです。

このマーケットが立地した三宮東地区とは戦前どのような場所だったのかと思いますよね。当時の土地の来歴を調べてみると、1897年から葺合新道開鑿事業という地主による組合区画整理事業が行われていました。戦前の神戸市内では公主導の土地区画整理事業は行われていませんが、明治期から昭和初期にかけて各地で地主による区画整理が行われていました。国際マーケットが立地した雲井通6丁目と旭通4丁目も、その葺合新道開削事業で造られた街区でした。終戦時までの土地所有を見てみると、雲井通6丁目の大部分は三田藩主の九鬼、旭通5丁目の大部分は森本倉庫創業者の森本六兵衛が所有していました。森本倉庫は、この南側に広がっていたイースト・キャンプでも土地・建物を持った大地主でした。

これは1946年9月18日に発行された「兵庫県報」です。価格等取締規則に基づく兵庫県令第百十九号「露店営業取締規則」が県令で出され、即日

施行されました。「露店営業」の定義に始まり、販売禁止の品目の指定や出店制限・禁止に知事の権限があることや、制限地区内の露店営業には管轄警察署長に許可を受けることなどの管理体制が布かれるようになりました。この時に、朝鮮人自由商人連合会も加盟する営業者たちのデータを取りまとめて、「土地所有者又は管理者の承諾書」を提出したわけです。

ここでは、占領軍の命令による営業禁止・制限地区を設定し、土地所有者または管理者の承諾書を添付した営業申請を行うこと、地区ごとの組合結成と自治統制の推奨などについて、改めて成文化されました。その主たる目的は、交通・衛生・公安の秩序回復で、これらを露店営業が脅かしていると認識されていたようです。執行心得には闇市化や犯罪の温床化の恐れのあるときは制限地区に指定することが定められていて、占領軍が闇市への警戒心をかなり持っていたことも読み取れました。雲井通と旭通の全域は葺合署管轄の制限地区にあたりますが、マーケット建設後も露店営業は増加しているのです。闇市化しない露店営業とみなされたのかもしれませんが。

三宮マーケットを開業するにあたり、朝鮮人自由商人連合会は1946年9月24日付『神戸新聞』に「急告」と題した新聞広告を出しました。

「急告 今般露店営業者ハ露天営業取締規則改正ニ基キ警察当局ノ許可ヲ受ケナケレバ営業出来ナクナリマシタ。省線三宮駅東ノ新設三宮国際マーケット二店舗ヲ持タレタ方ハ番号札（営業書）持参ノ上九月二十五日迄当会事務所へ申込ンデ下サイ。尚三宮、元町高架下ニテ目下営業シツアル会員ニシテ土地ノ所有者又ハ管理者ノ承諾書ヲ所持ノ方モ九月二十五日迄当事務所へ申請ノ事。申請用紙ハ当事務所ニアリマス。九月二十一日 神戸市生田区元町二丁目高架一三六号 朝鮮自由商人連合会」

そして、1946年8月から10月2日に三宮国際マーケットが開業するまでの4段階を整理すると次の通りです。

第一段階は、八・一肅正の後に、同会に所属した立退き対象の商人たち約450人を旭通3丁目に屋台店のまま仮移転させます。第二段階は、雲井通6丁目北側半分、現在のサンシティの北側に400軒の店舗を建設し、800件の申込みに対する抽選を行いました。第三段階では、露店営業取締規則で禁止地区となった緑地帯と高架橋南路上の業者のために、旭通4丁目に追加建設を行います。そして、第四段階として、さらに雲井通6丁目南側半分にも追加建設を行い、合計607軒の店舗が完成して開業しました。

1947年1月、朝鮮人自由商人連合会は「発展的解消」を遂げて、「朝鮮人商業経済会」として成立しました。「商経」と呼ばれ、その後も国際マーケットのテナントの管理組織として機能していました。

三ノ宮駅により近い雲井通6丁目は、ゴム靴などのゴム製品の卸問屋街になり、旭通4丁目では玩具・菓子の卸売営業が、当初の主たる営業品目になりました。しかし、1950年にゴム製品の統制が撤廃され、営業者の入れ替わりが激しくなります。開業時点はまだ統制経済下でゴム製品が対象品目であったので、本来は自由営業してはいけなかったのですが、国際マーケットでは2年の営業許可を県警に取りつけて、ゴム靴を販売していました。長田で製造再開していたゴム靴を小売りするための営業特区のような機能を持たせて、結果的には1948年10月に許可が切れても販売を続けたそうです。ただし、統制撤廃後にはゴム靴販売のみでは利益が出ないために業種が変わっていきます。シューズセンター街とアーチを架け替えて、スニーカーもたくさん売っていたと聞きました。当時の写真を見ると開業当初の平屋からの増改築が進み、ほぼ総二階建てになり、二階部分の階高は不揃いで、屋根の棟方向が異なったり物干し場がつくられたりしている部分もあったようです。明らかに二階に住んで一階で営業をしていたのでしょう。

1950年代後半には帰国事業によって初期の営業者が減少していきました。この時期に営業者や居住者の入れ替わりが進み、集住地区というよりは営業場所の性格が強くなりました。その歯抜けになったマーケットには、日本人による社会悪が持ち込まれていきます。そうして麻薬や売春や男娼などの「こわい」場所のイメージがついたのが、50年代後半から60年代の動向でした。1970年代になると、これらの悪場所のイメージを払拭する再開発に着手していきます。

1979年に「三宮東地区再開発基本計画」によって再開発が始動しました。1981年になると、雲井通6丁目の三宮国際マーケットの東側の雲井通5丁目に、再開発ビルのサンバルが完成しています。これが、三宮東地区の中で最初にできた再開発ビルです。この北側の東西方向には三宮東問屋街があったため、再開発ビルの1階にも店舗の面影が残りました。そして、ポートピア博覧会開催に向けて建てられたポートライナーの下に位置する磯上線の拡幅を機に、雲井通6丁目の立退きが進みました。

三宮東地区では、1980年代から90年代にかけて震災前までに第一種市街地再開発事業で再開発ビルが完成した街区と、震災後に残ってしまった街区の二つに性格が分かれました。2013年に完成した旭通4丁目のシティタワータウンは、国際マーケットの名残として最も長く残った街区です。1981年に再開発準備組合はできましたが、区画が大きい上に権利関係の問題やバブル崩壊に始まる景気の落ち込み、そして阪神・淡路大震災が起きて、2007年ようやく都市計画決定をみました。完成まで33年にわたった「震災復興事業の集大成」として神戸市のホームページにも記載されています。

三宮自由市場から三宮高架商店街へ

最後に、高架商店街の事例を一つお話しして終わります。三宮高架商店街は、これまでお話ししてきたように多様な闇市の営業者がいた中で、朝鮮人自由商人連合会に続いた「国際総商組合」が台湾省民会を基盤に1946

年5月に結成された組織であったことが特徴の一つでした。当時の新聞では「台湾人」と書かれていたので、ここではそれに倣いますが、台湾人を会長にした国際総商組合が結成されて、そこに受入れる組合員には同地で営業していれば国籍も民族も問わないと掲げたために、最大規模の組合になりました。1946年2月の加盟店舗数は976店、営業者が1,371名と大変多く、そのうち外国人は259名で15%であったことが報じられていました。外国人の割合は思ったよりも少ないですね。

そして、三宮自由市場の中では高架下の店舗群だけは、路上店舗が1946年秋の露店営業取締規則に従って移転した後も、移転することなく営業を続けることができました。1947年になると高架下の営業は、昼には古着屋が多く、夜には一杯飲み屋になるという昼夜の営業品目を変える状態となったようです。

現在の三宮高架商店街には飲み屋も少ないので、想像する風景には差があるかもしれませんね。また、1階やや上ぐらいの高さに天井も造られて照明が付いているので、空間の見え方も違いますね。

終戦当時の三宮の駅周辺の状況として、昭和初期に省線と阪急の鉄道高架化と、阪神の三宮への地下乗入れが行われていました。この区間の鉄道高架橋は、北側を阪急から山陽となる路線と、南側をJRの三ノ宮駅から元町駅までの路線の2本が並走しています。阪急三宮駅以西になると徐々に低くなっていきますから、この区間の商業集積はどこを話しているのかとても分かりにくいと思います。

高架下には、JR三ノ宮駅から元町駅間の店舗群として三宮高架商店街、元町駅から神戸駅間の店舗群として元町高架通商店街があります。現在は阪急三宮駅西口の西側にJRとの間に屋根をかけた阪急西口商店街という飲食店街もあります。また、先ほど紹介した新楽街は「高架下の山側」に位置した飲食店街で、これは当時の新聞や雑誌などの記述を突き合わせると、現在の「三宮阪急楽天地」という商業集積とも重なるように思われます。



図7 1947年6月の三宮高架下の自由市場
(兵庫県立神戸高等学校所蔵写真帳)

阪急三宮駅の西口から下りて東側は、JR高架下の2階に繋がっているのですがそこが三宮阪急楽天地という名称です。現場に入ってしまうと位置関係がよくわからなくなるのですが、考え出すと不思議ですよ。

闇市が路上を去った後、高架下では露店群による営業が続きました。【図7】神戸市はこれらの露店群に対して道路占有許可を出し、店舗群と市は1947年6月1日から半年間、高架下の敷地を1ヶ月につき坪7円80銭とする賃貸契約を結んだことが、同年末に

報じられています。しかし、1947年末で契約が切れて立ち退くわけもなく、市建設局と露店業者との間に道路使用協議会が開かれ、許可期限は1948年3月まで再延長することとなり、再契約を結んで営業が続けられました。

そして、同時期には、道路占用の問題とは異なる焦点の飲食業に対する規制も影響しました。全国的な政令として1947年7月に飲食営業緊急措置令、1949年5月には法律化した飲食営業臨時規制法が施行され、主食や酒類の提供が禁止されます。これによって、それまでは価格の適正化を図りながら、主食として白米などを出し、酒類も販売することで商売をしていた店舗が立ち行かなくなるわけです。そこで、廃業や転業を選ぶか、闇営業するかという二択を迫られます。当時の三宮高架下の店舗では、闇営業を選んだ飲食店が多く見られました。また、酒類を提供しない「喫茶店」

という営業形態を選べば営業を継続できたので、喫茶店に転業するが裏では酒を提供という抜け道を突く店舗も多かったようです。さらに、接待を伴う飲食店で働いていた女性従業員はこの措置に伴い失業するという影響もありました。

これら道路占用問題と飲食規制の影響が一区切りするタイミングの1949年5月に中小企業等協同組合法が施行されました。これを機に、知事の許可を得て、統一的な店舗形態への改築を果して、6月に三宮商店街協同組合が創設されました。そして、1950年8月には、公認飲食店街として営業を続けていた新楽街を吸収合併して「三宮高架商店街」が設立されました。闇市を原点とする高架下商店街が公認飲食店街を飲み込むという逆転劇がここにあったと言えるでしょう。

おわりに

最後に、神戸の闇市をめぐる主体と市街地形成についてまとめます。戦後、焼け跡となっていた神戸の中心市街地には闇市が現れ、また同時期に占領軍が進駐・接収を始めました。その立地する場所は三宮地域に近接していました。

闇市は、戦後に全国各地の駅前や空地に現れましたが、神戸・三宮の闇市については物流と人の往来に大いに恵まれたことから、急激に拡大していきました。県警による在留外国人のリーダーシップへの怯みも相まって、行政の取締りに加えて、自治統制が推奨されていきました。その結果、闇市の中には民族や営業場所を基盤にした営業者組織が結成され、各営業者組織が闇市からマーケットや商店街を形成していきました。

戦後の三宮は、商業集積と占領軍の業務機能の集中から、間もなく中心市街地の地位を得ていきます。闇市以外にも公認飲食店街や新興商店街が生まれて、商業主導のまちとして復興の市街地形成に向かっていきました。